# 川柳の雅論

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿五年八月一日發行第五卷第八號
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通卷二百七十九号

八月號

No.279

# 句評 川柳街

松山　前田伍健
横濱　福田山雨楼
鳥取　大西八歩

**伍　健**＝久しぶりに寄せていただきます。どうも句評は不得手で……と申して現在四國四縣の外に隣縣から飛入りもある、例の放送角力一分間吟を一分間判断で片付けて居る、行司の私として句評が出來ぬとも云えず、まあ思うた事を思いのまゝに申上げて、禪語の庭前の柏樹、隻手の響、何んとでもハヽンと判つたような判らぬような、うなづきが少々でもあつたら倖せであります。毎月柳誌を見て私は朱鉛筆で共鳴した句え点をつける癖がありますが、五月号の川柳塔第一行第一句の

**懇切叮嚀結局銀行は貸さぬ**
生々庵

**也**

は二十三字の字余り詩形で8、5、5、5、の組立てであり、作者はそんな事はお構いなくズバリと思つたまゝを、思つたまゝに云つたものであると思われ、一寸見には句意も平凡であるが、再三読むと予期通りの予期外れの交錯のおかしさ、あわれさ、それを包む今の世の風が、顔を逆撫でしたような感じが押しかぶせて來る。叮嚀だけでも不足であり懇切があるので一層感じが深くなつて來る。從つてまあ少し簡明にとか、まあ少し柔軟にとか思う表現慾を、この字余りが苦にならず、むしろ字余りであつてこそこの句の、カロリー図太さがよく出て居ると思いますが如何でしょう。それから近頃字余りで、影法師と独り角力とるような句がありますが、あれはどうも私には感心しません。私自身の勉強が足らぬ故かも知れません。

**八　歩**＝この句は昨今の小生の立場を詠んだ感が深い。実際銀行では度々この手でいじめられています。時局吟の佳句。借りて呉れと銀行から頼まれた時代も日本にあつたと思えば今更昔がなつかしい。

**山雨樓**＝アイロニーはよくわかる。たしかに時事吟である。がこの銀行観、この句想は既に常識となつていることではないかと思う。常識川柳と云う呼び方があるかどうか知らぬが、句のねらいが常識化された視野に止まるとき、その表現によほどの奇警さ、新鮮さ鋭さがない限り、われわれの感性は抵抗を覚えなくなる。この句の表現は字余りでしかもそれが苦にならぬ点は伍健氏の申された通りであるがその表現の図太さが内容の常識化を救つていない点に自分は不満がある。なおこの句は銀行から借金のできぬ中小企業者の立場を第三者的に眺めているところに、おかしみが生れているのであるが、現実借金のできぬ苦しみにある立場の作者の句なら、もつとはげしい圧力が加わつていたであろう。しかし誤解されては困るが、自分は何も尖鋭な句ばかりを求めているわけではなく、この句も亦沢山の視角の中の片鱗を物語つているものとして或る真実に触れているが、常識云々の難点を指摘したに止まる。

**つめよつて來ればこちらも規則なり**
久米雄

**八　歩**＝此の句を読んでいると対談者の顔が次第に真剣味を増して、初め笑顔だつた頬がけいれんさえも帶びて來る様子がよくわかる。つめよる方も人間でありつめ寄られる方も人間であれば、言葉次第でつい規則も持出したくもなろう。人間の本心にふれてその感情が言外によく溢れていると思います。

**伍　健**＝「規則なり」が如何でしょう。つまり「なり」が説明的、解答式に当然の如く表現されている様にも思われますが、何かうまい円轉滑脱のコナシ方がないものでしょうか。これは私の慾張りかも知れません。句全体はさすがに久米雄さんでうまいものであります。

**山雨樓**＝この場合「なり」で切迫感が出てぴつたりしているように思われる。自分はそれよりもこの句の背後の思想を衝きたいと思う。句主は國鉄某大駅の乗客掛主任であるがおそらく実感句であろう規則をたてにとつて云えば非は乗客の側にある場合が多いであろう。しかし國鉄は昨年六月から公共企業体に改められ、文字通り公僕として從事員はサービスの向上に努めているのである。自己を律する規則はこれを堅持するも可なりであるが、お客の方はあくまで親切に扱い、誤解や間違いの起らぬよう所謂内剛外柔の風を馴致し、かりそめにも規則づくめで引つ張り廻したりすることのないように心がけねばならぬところだと思う。にも拘わらず、この句は、ともすれば規則を振り廻したがつている。その官僚的封建思想が句の背後にわだかまつている。句が正直にしかも不用意にこれを物語つているのだ。國鉄はまだ脱皮していない。と、自分は國民を代表して句主を叱つておくが、さて自分も永年國鉄の飯を食つた人間であり、不正乗車など余りに多いことも承知して


山之内
血圧降下に
アークレミン
定剤
注射
血管アウトホルモンとアミン塩類
山之内製薬

いる。お互に自戒し反省し協力するのでなければ、自由も平和も民主化も促進されぬであろう。結局この句は俗悪を通じて何物かを教えているのである。

**神さまへ腰の痛いのもたのみ**　豆秋

山雨樓＝例によつて豆秋兄の一茶風のユーモアである。おそらく主観句ではなく、道聽途説にヒントを得たおかしみと思うが、一度兄の人間濾過にかかると大低の川柳素材がその藥籠中のものになるから面白い。しかしこの句は面白味の底に人間の弱さ、盲信と云つた一面をねらつているので、そこに廣い振幅が感じられる。神をうたつた句では「神様へ親子五人と申上げ、紋太」「子宝ばかり神様は授け、朝太郎」「神に祈るほどの不幸に出会わさず、茶々」などの句を思い出すが、「大日本は神國なり」と云う神がかり的精神にまどわされていた時代のことを振返り、おかしくてならなかつた。われわれはこの句を通じて神えの認識を新らしくすべきだと思う。

伍　健＝山雨楼さんの評につきています。去り氣なく人間の弱さ悩みを詠んでの泣き笑い。豆秋さんの独壇場でしよう。さてヒョイと私の心に浮んだのですが、鑑賞評の影響で後進の方々が、この豆秋調を一意お手本にしたら問題が起るのではないでしようか。実は四國四縣放送川柳角力で勝句をほめると、次の飛入角力に直ぐ影響して來まして、尤も何千の句中には川柳を天流或は撰流應募と記す程度の方もあるのですが、影響に驚いている次第です。川柳高峰には幾筋幾十筋の登山路があり、各自が開拓して行くところに向上発展があるのですが、そう云う私自身もそれに悩んで樂に作句せぬよう、自責修行していますがろくだま（これは伊予の方言で不充分の意）のものばかりでへがすい（弱いと云う意）のを嘆いています。要するにイヽ句であれば、あるだけ初心者の方に模擬型、樂作型の影響も大きいと存じまして老人の取越し苦労、脱線の卷を――相すみません。

八　歩＝天、皇　即人間が叫ばれている今日、神も亦人間と云う理論も成り立つ訳です。その人間である神様え腰の痛みを頼む人は封建性の抜け切らぬ老人だと云う事がわかる。此の句こゝ数十年を経ずして日本にも神様え腰の痛いのまで御願いした者が居たと云う考証家の参考資料になるや否や、神様で無い私にもわからない。

**平和とは先生でさえ判らない**　豆秋

伍　健＝頭が痛い程考えなならん川柳――面白くも何んのカロリーもないもの、自意識のみ強く普通神経では判らぬ、やつと判つても何んのこつたと云いたい川柳の、高級とか新しいとか云つておる時、この句を味わつて「川柳の眞」はこれだと嬉しくなりました。この句説明する迄もなく全面だ單独だ、平和だ水爆だ何々だとあゝ云えばこう云う世の中を、ズバリと刺した、川柳らしい「がつたり、ぶつたり」せぬ川柳だと思います。

八　歩＝豆秋調の句。人生と平和、戦争と平和、先生はおろか一國の政治家にもわからないかも知れぬ。原爆の出現によつて平和の意義益々複雜性となる。ガンヂーかキリストに聞けばわかつているかも知れない。

山雨樓＝少しパラフレエズして見たい。この句の「平和とは」は、平和とはどう云うものか、と云う平和の概念であり、理論であり抽象的解釈を指したもののように受取れるが、句意は平和の見透し、講和問題、國際情勢の判断とか帰趨を指しているようである。前者なら先生（低学年級の先生）にも理想や夢があるであろうし、國連やユネスコ運動、世界は一つなどの論議が盛んな今日、ゆがみなりにも説明がつくであろう。後者なら世界廣しと雖も誰一人わかる者はないのだ。でこの句の上五を「平和の日」或は「平和來」とすれば句意と表現とがぴつたりして來るが同時に句想は平凡になつてしまう。だから原句の表現には疑問を残しつつも「世界平和と云うものが來るかどうかは」と云う意味に解して受取れぬことはない。要するに上五の不明瞭さは残るが、問題が余りに複雜、深刻なだけに豆秋調のユーモアーとしていただくのが無難であろう。

**戦犯に出世頭の名を見つけ**　柳兒

八　歩＝この出世頭、学校時代は秀才にしてクラスメート羨望の的であつたであろう。上京後先輩に見込まれその子女を夫人に配し、帰郷の度にその前途を嘱目されていたのが終戦と同時に戦犯と名が変る。この句の裏面に同情と一緒に今迄頭を抑えられていた感情が一掃されて、安心感に似た人間本能の持つ薄情を見逃してはならぬ。

伍　健＝うまい句ですな、八歩さんの説明で至れりつくせりであります。……裏面つまりこの句のこの次に云わんとするところを余情によく響かせておりますが、うまいなと思うと共に廣く戦犯者に対して氣の毒の情が起つて、うまければうまい程川柳の長所、短所……大衆の心線に触れる冷相、熱相が川柳と云うものに対しプラスするかマイナスに成るか……これは飛んだ脱線でわれわれ年輩の特別心理かも知れませんが……

山雨樓＝この句に対して自分には又別箇の感懐がある。と云うのは自分の長男が戦死して愛惜やる方なく生えの執着が人一倍深いからである。はかなく散華したことを考えると戦犯でも抑留でも脱走でもよい生きていてくれたらまた会える日もあろうと云うものだ。たとえ戦犯で処刑され絞首台に上るとしても、一日をながらえ遺書を綴りかたみが送られるであろう。この句を読むにつけてもそう云う愚痴が出るのである。と云つてこの句の川柳性にケチをつける


最短時間で結ぶ
大阪－名古屋
3時間25分
特急
毎日3往復
座席指定制一
特急料金 ¥50
上本町発
7.40 12.40 16.40
名古屋発
8.05 13.05 17.05
近畿日本鉄道

# 貴志子逝く

☆閨秀作家米本貴志子女史（川柳不朽詞会特別会員）が六月十五日午後四時廿五分、泉北郡高石町の仮寓で急逝された。一昨年十二月軽微な腦溢血のため臥床され、その後小康を得ていられたが、去月十三日にわかに病あらたまり十五日に不帰の客となられたことは寔に痛惜に堪えない。行年五十五歳、法名は釈尼貴志。

☆女史は明治廿七年八月十五日出生、本名はきし子、米本儀之助氏に嫁し四男一女の母、資性聰明世事に恬淡であつた。短歌、俳句等もよくされていたが昭和四年以来、廊生路郎師に私淑、川柳にその才能を遺憾なく発揮されていた。「皇軍にすまぬと思ふ湯があふれ」の名吟に、人間として女性としてのあたたかみを詠まれていたが「うどむしが仲間を獄つてせりあがり」で人間の持つ醜悪な一面を諷刺されるなど、寡作ではあつたが非凡な柳眼の持主であつた。

☆左に昭和七年以来の「川柳雑誌」に発表された作品の一部を抄出して、今は亡き君を偲ぶよすがとする。

貴志子句抄

移り氣のまた飛石を掘らせてゐ
天下る嫁へ湯殿の模様がへ
新旧女中交代
さは云へど逃げた魚より釣れた魚
所存は毛頭ない。それのみかこの句には運命、偶然、懐旧等の複雑味が盛られている点、東條や松岡ら有名人でなしに佐官級の友達だつたと云う、或る意味での庶民性を捉えている点など複雑な句意に敬意を表するものである。ただ鑑賞する立場々々によつて句が呼びかける連想に幅があることを云いたかつたのである。

銀婚の妻トーストパンに似て　十九平

山雨楼＝結婚後三十三年になる自分にはこの句の趣がよくわかる。川柳一家の路郎先生御夫妻の評判は申すまでもありませんが、実に糟糠の妻は堂を下さずで、妻えの感謝、いたわりは歳をとるに従つて深くなるのが人情である。トストパンは一見無味乾燥のようであるが、噛みしめてこそその味覚に感謝の心が湧くのである。比喩の句であるが含蓄に富んでいる。「本当の女房五十になつてから　桃村」「もう氣兼ねしますもんかと妻五十　太路」「妻をかばう氣持も五十過ぎてから　吐平」など、それ〴〵に面白いが、この句と共に何れも人間の眞実に触れている。定型に一音字足りないがどんな言葉を加えても蛇足である。

伍健＝トーストパンとは見つけどころですな。

八歩＝トーストに似たる妻、噛みしめた味はバタでなくジャムであろう。孤色にこげたる具合、年は取つてもりん氣は抜けぬか。呵々……

伊豫方言

## どうぞ、なもし

前田伍健

漱石の「坊つちやん」文六の「てんやわんや」などで伊予の方言が相当有名に成つて来たが、この「てんやわんや」も五月に現地ロケがあり佐野周二一行が来て道後、宇和島、岩松などを撮りロケ致した。従つて伊予方言がお耳にお目に入るだろうと思つて居る。そこで伊予方言の一部を川柳形式にして御参考の爲め御覧にいれよう。

婦唱夫和いかんかなもし、いこかれや
▽行きませんか、行こう
鏡輪のそううま〳〵といけるかや
▽いけない
あれこれといそしいわりに儒か


暑中御伺（柳人交歓のページ）

清水市下清水四九一　富士野鞍馬

大阪市東住吉区平野西之町八三　橋本綠雨

阿倍野区旭町三丁目一四　須崎豆秋

川柳雅号　百酒洞栞　西尾巖
大阪府中河内郡曙川村八尾木
電話　八尾一七三番

大阪市西成区松通九丁目二十三　土井文蝶

大阪市（都島局区内）旭区古市大道四丁目五十一番地　竹田芦穂

デパートの夫婦落ち合ふとこをきめ
垣に來て山羊は甘へた声を出し
大河に写れば灯かげこせつかず
うじむしが仲間を蹴つてせりあがり
鉄瓶のたぎる我家へ退院す
兵一人送る玄関明け放ち

長崎名誉教授御引退に捧ぐ

打ちやみし鐘の余韻の清らかさ
むしパンに似た雲一つ冬の空
硯墨手本揃へてあるばかり
女中部屋覗けばみんな座りかへ
軸替へて手紙を書いて今日も暮れ
皇軍にすまぬと思ふ湯があふれ
一抹の哀れ結納灯に映えて
手の物を取られた様に廣く住み
味つて母の小言を思へかし
弱き者汝は嫁の親といふ
味噌こしを提げる覚悟もいぢらしく
元旦のコタツに世界地図があり
およばれに蒔絵づくめでもてなされ
炭はねて悠々女史に座を立たせ
痛快に煮〆を食つて子らはいに
橋筋で金の乏しさ胸に來る
百姓の頭テカ〳〵マンドリン
繼はぎの服かと聞けばはやりとか
やればすぐ返へすお人に肩が凝り
おくどさん光らせ代々養子です
狭い村クシャミをしてもひゞくなり
お月さん敗戰國の團子です
虫の夜半宇宙の廣さ思はされ

▼写眞説明——数年前、進駐軍に接收された高師の浜の邸内にうずくまる或る日の貴志子女史

▽体をよく使う、せわしい
海水浴天下御免のはだかりよう
▽廣げる廣がる
酒癖のにやくらかして、にえこんで
▽撲る、凹む
それにしてもへらこい奴の日達者
▽心臓が強い
へーざしであった二人の他人めき
▽永らく、久しく
食べるだけ、どうし　こうしと立話
▽やうやく
蝙蝠におどれ、すどれと裏長屋
▽お前、貴様
わやくちやの中にそれ〴〵子に育ち
▽乱雑
恋と云うものがよもだを云はせもし
▽ウヤムヤ
草角力足をたごうた一と騒ぎ
▽関節が、外れる
そじやけんと女なか〳〵敗けて居ず
▽そうである故
当選後れんごの皮の剝げかゝり
▽聖人ぶつた
道楽がれつい男にしてしまい
▽くどい
城の道なもし言葉で教へられ
エーナもしそうジャなもしと道後の湯
▽ですれ、坊つちやんに、よく・ある言葉
ちつしもない話になつた釣自慢
▽大変な、仰山な
納涼台うつれますなと夜を更かし
▽むし暑い

世の移り知るヤ知らずヤうんか無事
▽天下泰平
のふぞな奏にも似ず友の情
▽粗末な
法律はこうと、やれこい事になり
▽むつかしい
好きな事でやりつけました苦が笑い
▽病氣になつた
税務員まんべに願う声に飽き
▽公平に
この外にいざらす（移動する）いでらしい（持ちのよい）いなげな（悪い）ろくだま（不充分）はんす（馬鹿）ほかす（捨てる）へつちよ（片寄る）へばる（嫌がる）ちんちんまんま（米の飯）たげし（試みに）つゞる（虫が食う）なまかなあ（怠ける）…故本縣大本代議士が議会で使い、話題になつた言葉）ちちがあく（片付く）くゞる（文句を云う）まくる（捨てる）シヤが（間違い）びんだれ（だらしない）すこへいな（生意氣）すんどろ（横になる）等々があるが省略——如何です。文六の向ふを張つて、てんやわんや以上の伊予方言を見付け出して名小説を、おかき、なされては、どうぞなもし。

にきひとり美顔水
堯谷眼天堂

横浜市保土ヶ谷区岩崎町一〇
福田山雨楼

前田伍健
松山市眞砂町二一

水谷鮎美
尼崎市西宇口開一八一

浜田久米雄
岡山縣和氣郡吉永町

大阪市阿倍野区天王寺町二五七〇
大阪鉄道病院内科
北川春巣

大阪市阿倍野区北田辺町三四三
山人居　水谷竹荘

川雜大牟田支部
高田抱逸
大牟田市瓦町二四

大阪市東住吉区鷹合町三三〇
池沢慈星

和歌山今福北部一二八
秋月宏方

長野文庫
今治市神明町

石田沐天
阿部野区阪南町西二ノ三三

杉谷湖山
鳥取市職人町

増田耕民
鳥取市川端三丁目

# 川柳塔

大阪市　麻生葭乃

此癖を捨てたら形見なにもなし
愚痴を聞く間もいそがしい四本針
ある時は無色無臭といふあたま
タイムイヅマネー鰯やいてる間の読書

大阪市　中島生々庵

U・Oさんの息を悼む
おいただつたおしやべりだつた愚痴ばなし

兵庫縣　戸倉普天

九分九厘纏つた頃ボスが出る
ペラ〳〵の國民服で村の会
住宅地アヽ此おやしきも名が変り
將棋盤も持つて買出し乘つて來る

大阪市　浪玲之介

人知れず小さい善がして見たし
ない振りをしある振りをして暮し
親類は死に損なふと貸して呉れ
週給にして先月の分を呉れ
放送は儂より下手で全國区

平塚市　木村孤浪

パーマどこいゝかと親父のくどいこと
空腹を角のピアノがいら立たせ
五六本白鹿の空瓶もおき
政岡を流石ばあちやんワンセント
アベックと分り邪慳にしたく也

アベックの揺れるに困るリンタク屋

横浜市　福田山雨楼

大学生の知性は席を譲らざる
咳すれば一ととこ痛むボロ船か
人生の落目を思ふ年度末
東京のホームで老けてゆく駅夫

東京都　前山北海

腹立てば英語で怒鳴る癖が出る
訪日へパパとママとを先にやり
もたれる氣起きぬ夫へ妻の愚痴
金よりも愛の言葉が慾しい妻

布哇　内藤草一郎

又別れましたと派手な髪で会ひ
野暮々々と笑つた奴が借りに來る
美男とは見えずプールのトップ切る
抓ねられてたゝかれてあご撫でて居る
頼りないとこも嬉しい年下の

大坂　形水

如才ないボーイに名前おぼへられ
天ぷらは俺がするよと台所
凡人の生活梅干漬けるなり

大阪市　福田妄夢

絞首台最後のうそをついてから
ふたアりをのんだみづうみもとのまゝ
ストリップショウわたしも裸で御座います

大牟田市　高田抱逸

資格審査実は名を賣るだけの肚
貸ボート店の主人は泳げない

布哇　市岡曉舟

行水の年増乳房を恥じらわず
化粧部屋画伯よろこぶポーズで居
図太さは餞別欲しさ触れ廻り

布哇二世中共産党員多さに一驚す

血で染めた誉れを赤で汚すとは

大阪市　市場沒食子

老眼鏡世相にうとい論を吐く
キッスより以上に出ない未亡人
ギブスベッドで迎へる春のいぢらしさ
嫁入つて來た着物まで税で賣り

名古屋市　吉田水車

老僧の背に蓮の絵のほのぼのと
冷えびえとして銀行の大理石
あぢさいの何にすねたか藍で咲き

大阪市　北川春巣

失業保険の方がよかつた職につき
よんどころなくとは云わぬノーハット
ロンヂンを五分進めたまゝで持ち

義弟東京にて結婚

國に家あり仮住居亦樂し

奈良縣　尾崎方正

顔ふれへ懈くなつた選挙権
鯉のぼり美々しく揺れて子は育ち

岡山市　鈴木九坡

貸してゐる方がおじぎをして帰り
良妻と呼ばれたゞ〳〵無抵抗
嫁かぬのは身体の弱いせいにする
晝のバス女離れて席を取り
労働歌社長きこえぬ振りもする
製図するように田植の糸を引き
引つ越しを隣りの猫に見送られ

岡山縣　大森風來子

湯豆腐へ恩師ゆつくり箸がのび

大阪市　木下幽王

親の慾医師の理性と無言の火花
兒がものを云ふて呉れない怖しさ

鳥取市　中島鉄洲

集金え本社はストをして居ます
夏枯を妻に納得させて置き

出雲市　尼　綠之助

久しぶり金の話にふとだまり
アベックの何かうつろな笑顔して

大阪市　水谷竹莊

でも嬉しかつたと女帶をしめ
浮氣されても夫の肩をもち
慰めて慰さめられて好きと好き
愛のない生活はいやと眷を向け
それ程の恋にも死ねぬ現実さ
生活苦色氣なんかが出るものか

廣島縣　弘津柳慶

達筆な便りボチ〳〵拾ひ読み
長男はおべつか使ふ事になれ
宿直に風が出て來て不氣味なり
妻を叱れば子供等皆んな反抗し

下関市　國弘半休門

もうとうに社長投げ出す腹でゐる

八代市　佐野卜占

誘惑を蹴つて出てから雨にあい
口紅と頬紅嘘と嘘が寄り
いつはりの多き女のさゝやきに
二号三号ブルヂョア忙しく

大阪市　吉田斜水

俺が想つてる程女考へず
泣かされて來た子を見がまた泣し
乳房見よと言わんばかりの夏の服

布施市　糸本醉月

ぐら〳〵と地震が税務署おどかした
衣料下落やはり女は美くしい
吾れ老へり庭の燈籠へこけを待ち

奈良縣　白牛奇朗

陽が落ちたので向日葵も疲れたり
夕立へゆつくり蛙目をとぢる
遠慮なく洋傘の方を借りられる

岡山縣　山分淑郎

おついでに心も呉れた未亡人
追いかけて不実をなじる恋となり
言ひそびれ二人何処まで月を踏む
汽車の音大きくなつて生きる氣に
嘘をつく事も人間だけのもの

高知市　月原宵明

後添いと今日も出かける競輪場
蚊帳に入る女の所作は芝居めき
夏だけを洋装にする暮し向き
盛り場で母おろ〳〵として不憫

大阪市　島正則

下駄履きの弁士と換る共産党
磯馴松春の淡路を背にバレエ
やつと象見て來た肩の砂ぼこり

大阪市　冨岡淡舟

襟垢を氣にして居たり春の街
人間の脆さよ心臓麻痺で死に
一攫千金の誰か夢なき宝くじ
どないしたんやろ朝鮮語の喧嘩
事なかれ主義にはなれぬ個性持ち

奈良縣　飯降白香

弁当のぬくみへ母の老けた顔
世論ごう〳〵田螺のやうにじつとする

奈良縣　西辻竹青

一うねを豌豆にして新世帶
酒代は協議費として精算し

呉市　林野甦光

手のしわへ又初めやうかな共稼
消防署燒けてポンプも避難した
妾宅の火鉢が賣りに出たと言ふ

大阪市　竹田芦穂

遮断機を勝ち氣は低く通り抜け
若様と呼ばれぶらんこ部屋でする
腹這の父促して金魚買ふ
交渉は下手で小唄は得意なり

京都府　間島青丹子

通る人みな倖に見える日よ
金詰りだと云ふのに服も靴もさら
晩酌に父の眼鏡がずりさがり
無駄話妓默つて呑みつゞけ
再婚へそつと亡夫に手を掌せ

布施市　森下愛論

もう一度礼を言はせる女文字
はげしくも女競つて塗りたくる

大阪市　太田良子

倦怠期ですよと言ふて仲がよし

尼崎市　靜岡忠八

縄張りがどうしたと言ひ壜を投げ
父のセル娘は服にする野心
おめかけの技巧とやらに惚れて居る

大阪市　松江梅里

麦秋へ飯の合図の鎌を上げ
別当夫人の耳へ二号の三号の
喧嘩するくせにだん〳〵好きになり
理解ある主人と云はれ妬けもせず
出戻りが先に見て來た性映画
春宵一刻百円のボート漕ぐ

岡山縣　直原七面山

小娘とあなどつてゐて父無し兒
盛り上る乳房頂点見逃さず
未亡人もてはやされた丈のこと
男まさりの恋冷くて〳〵

承知ではあつたが余りに純な方
待ちぼうけ恋の前途は多事多難
抱擁へワン〳〵と妬いてゐる
宿敵の家の娘なれど恋は恋
其の恋を進めん爲のマスクとり
慾張りな両手に恋をぶら下げて
プシッケに娘の方が振り返り
年上の女服など着せて臭れ
生木裂く様に裂かれて五年経ち

岡山縣　黑田笑泉

北極星にて七面山氏と投宿

句の友とダブルベッドも旅の事
地下鉄で恩師と弟子とさがしあい
大阪の煙よ何時からたちこめる
おどかしの効かぬ女房になりにけり

宇部市　上林粗影

大臣の嘘を信じて父の貧
お供物を忘れた店の忙しさ
解けてゆく帶から女艶ぽい
平々凡々アメリカへ行きたし

兵庫縣　石岡正司

大過なく四十年とは淋し
落籍されてダンスとやらを教えられ
南無阿彌陀佛と喉佛つまみあげ

鳥取市　河村日満子

坊さんの数日雇もあるならん
燒香へ遅刻したのが先に立ち
遠足に昨日の天氣惜しがられ

兵庫縣　家沢莽花

丹前に着かえて部屋の名で呼ばれ
御自慢の僞の應挙へお茶が出る
ゆずられた儘で女は編み始め
四苦八苦して買ひ溜めてまだ嫁かず

歌の恋議会の恋と派手なこと

滋賀縣　黄瀬美秋

迷い子の案外きよとんとして座り
佛具屋の有難そうな中に座し
産制と知らず里では待ちわびる
惜しい氣はケーキ殘して出るふたり
当然のやうに先生嫁きおくれ

岡山市　藤本満年

役人と飲めば会議という名儀
値下りの浴衣涼しく肌が透き
借金をして血統の犬を飼ひ
瓢たんのようにバンドを締めて着る
親切な友が二号と別れさせ

熊本縣　西口如川

貧乏の善良誰も振り向かず
借る方は新茶の香りから褒める
全國区へ清き一票持て余し
其媚態金に惚てるとは言はず

岡山縣　福島鉄兒

美しい顔でとことんまで値切り
勳章を金庫に入れてどうする氣
二階借の方が看板派出に出し
撲ぐられてゐるのは金を貸した人

岡山縣　直原湖月

和裁洋裁出來て縁談遠くなり
アベックに自動車除行してくれず

岡山縣　黑田久米女

自由です出戻りなか〳〵負けとらず
役得か町長さんは脂ぎり

岡山市　藤本茶々

嬶曳の溜息だけで満足し
菓子の價を言うても子供驚かず
姑が堪えて家は平和なり

差向い蠅が一匹通り抜け
死ぬなんか可笑しくつてという娘
石の苔伯父の得意へ乘つておき
昔話こゝから先は酒が入る
屋上で待つてゐるとはおゝしんど

大阪市　福本翩骨

海に來ておーい〳〵と呼んで見た
水に氣を附けやと老母の便りが來

池田市　太田木声

氷屋にしてから雨が降りつゞき
急逝を惜しまれる身になり損ね

兵庫縣　榎南夏六

夏時間婦れば子守させられる
送別の小さな宴の果しなく
追憶へヴェールの様な雨が降る
焦燥の日へ廣告の豪華なる

大阪市　伊藤迷宮

ネクタイの賣場で初老意識する
宿直はサンマータイムを持て余し
氣まぐれのような娘の台所
新妻の料理附錄の味で出來

金沢市　安川久留美

あけがたの夢を忘れて腕を撫す
天井え來た熊蜂も巣に戻る

松山市　前田伍健

絵をかいておれば日永の主と云ふ
金持つた豚の如きが立候補
何んとでも拜め諸佛の眼はまとも

大阪市　橋本綠雨

達筆を少し下がつて眺めてゐ
やけ酒を呑める身でなし一人ぼち

# 窓口

## 挙手の礼と報酬

麻生路郎

句に就て考えさせられることは、その形式に於て、その内容に於て、ものの調和と云うことである。

戦時中には、私たちまでがよく挙手の礼をさせられる機会が多かつた。しかも平氣で、それをやつていたものである。今から考えると一寸滑稽に感じられる挙手の礼ではあつたが、不自然と云うよりも、その頃の生活狀態にピタリと調和していたのである。近ごろは挙手の礼の存在すら忘れて暮らしていたが、最近S消防署へ講演に招かれ、帰る時、サイドカーに乘せてもらつた私へ署員が一せいに挙手の礼をもつて見送られたので、私も思はず反射的に挙手の礼を返えした。無帽の私は天皇陛下のように帽子をさしあげて答礼する訳にいかなかつたのである。しかし、考えて見ると、サイドカーの場合、お辞儀をするよりも、挙手の礼の方が、ズツと、その場の雰囲氣に合致していたように思う。挙手の礼にしても陸軍と海軍とでは仕方が違つていたが、それぞれに環境にふさわしいように行われていたことを思うと、ホンの一寸したことでも、それ〴〵に適切な様式が生れ、その様式から少しズレても調和を欠ぎ、そのものの持ち味を喪失するものらしい。

作句にしても素材の調和、語彙の調和、音調の調和などが巧みに塩梅されて、はじめて佳吟が得られるのである。時に破調の佳吟がないでもないが、これとても厳密に云えば調和を破ぶつて第二の調和を形成しているのであつて、乱脈を意味するものではない。

私たち一家が、三重縣へ疎開していたころの経験に、農家え有形（衣料品）を與えると直ぐさま有形（食料品）で返えして来た。ところが無形（知識）を與えても何等返えしてはくれなかつた。私は有形を與えても、無形を與えても、返えして貰うことを予期して與えたことは一度もなかつたのであつたが、有形の場合には必ず返えすことを忘れなかつた。これによつて見ても農家の生活が文化的に如何にレヴエルが低いかと云うことが解るのであつた。

社会生活と云うものは、常に他人に有形を與えて有形を受け、無形を與えて有形を受け、有形を與えて無形を受け、無形を與えて無形を受けているものであるが、私たちのように文化の仕事をしているものは、有形を與えて有形を受け、無形を與えて無形をうける場合も稀ではないが、概して無形を與えて有形を受ける場合が多い。

従つて無形の價値を評價し得ない人たちや、過少評價される人たちからうける損失は小額とは云えない。文藝人の多くが富裕でない原因はこんなところにあるのである。しかしその罪が一方的でないことを認めないわけにはいかぬ。文藝人の思いあがつた無形財が眞に無價値である場合もあり、又有價値であつても、所謂猫に小判である場合もあるからである。特に恒産のない限り右に述べたような理由で文藝人の多くは濱貧に甘んじなければならないのである。殊に短詩文学で生活することの容易でないことは云うまでもなかろう。

## 鳥ケ辻川柳會の有馬吟行

有馬温泉鼓ケ滝にて　草右氏撮影

大阪遞信病院の鳥ケ辻川柳会の一行が、五月十四日午前十時に、阪急ビル西横手の有馬行のバス停に集合した。そして一行はバスが動き出すと一様に、フクイクとしたガムを噛んだ。これはハワイから四月下旬訪日された村田流水氏（不朽洞会員）が参加されての車中の贈物である。

月並に云えば、この日天氣晴朗で申分のない吟行日和である。車は池田街道を北走し、幾つかの新緑の山村河川を縫い、遙に蓬狭楽の景勝を賀瞰、爽涼の氣を満喫しながら、温泉境有馬に入つた。若林草右博士は神有電鉄で参加された。鱒の養魚場には仲よくならんで糸を垂れている新婚夫妻の春姿が映つていた。鼓ケ滝では一行の記念撮影をした。引返して、温泉に浸り浴後遞信保健所の攝泉荘で句莚が尾崎方正博士の挨拶によつて開始され、句に小宴に歡をつくし、暮色の迫るころ宝塚行のバスに投じて帰途についた。

写眞説明——前列右から、路郎・史葉・流水・沒食子・葉菜子・良子　中列右から晩成・方正・神峯・竹莊　後列右から春雄・斜水・愛論・桃村の諸氏

暑中御伺

吉田水車

名古屋市観月町一ノ六五番地

大坂形水

淡路津名郡志筑町

廣島縣加茂郡竹原町竹原專賣公社内　弘津柳慶

糸本醉月

布施市三ノ瀏一ノ四

大阪府中河内郡石切町上石切三六一　種瓜平

山口縣宇部市草江沖宇部炭鉱内　上林粗影

西口如川

熊本縣菊地郡大津町

滋賀縣貴生川町三本松十七　黄瀬美秋

敦賀市　舟木夢考

赤松無六

熊本市花岡山迫谷

岡山縣英田郡林野町　田村藤波　本名緑朗

横浜市菊名町六（戸羽方）　袴田智水

岡山縣久米郡弓削町上弓削　葛原秀鶴

# 近作柳樽

卷煙草そうだ彼の女も未亡人　大分縣表　情
あの税吏に失恋があり愉快なり　同
貰ひ湯をそつとうめればすぐ焚かれ　同
寄附せねど同窓会には乘りつける　同
威張るとて家の五票が他へまわり　同
溫泉あたりは來るもの宿は意にかけず　同
結局は自分のための敎祖さま　大牟田風浪
大火事を材木商の目で眺め　同
解職へ愛人も又去つて行き　同
原因は何であらうと馘は馘　同
当然の様に堕胎を說く娘等よ　同
当選を目出度くしたら儲ける氣　岡山縣娛句樂
頬冠りして選挙などよせつけず　同
会合へ意味の分らぬ折が出る　同
やかんから汲むお茶がわりすゝめられ　同
何分によろしくと言ふ酒を呑み　同
さん〳〵に待たして女笑つて來　岡山縣苑女
嘘ばかり書くのは倦いたボールペン　同
嘘の世を歩くかゞとがちびてゐる　同
仲人の前ではつきり嫌いです　同
買い出しにいつか來た村花の道　同
汽車の窓故郷はなんと小さき町　東京都東夢
つけたりの文句も嬉し妻の文　同
夜業した俸給までがスリに会ひ　同
婦人代議士子供産んだやいけぬか　同
妾云ふ純情棒げて居りますの　同
氷柱のとけるに似たる貯金帳　廣島縣芳泉
君とならなどと男に嘘があり　同
裕仁がなどと嫌味のまだ止まず　同
あざやかに廻れ右した未亡人　同
意氣地なく多情の妻を捨て切れず　同
日雇のそれで机に花を挿し　三原市正一
原爆のお蔭さあたいの名は娼婦　同
讓られた席へ背の子先づ降ろし　同
半分はお喋り修学旅行済む　同
朝風呂をもてなさんとて尻からげ　愛媛縣孤峰
まかされて心もとない台所　同
嘘らしい話本当らしく聞き　同
親切を押頂ける身が淋し　同
春眠曉を破る税の夢　大阪市春雄
誰がために作つてくれた人事院　同
往診料どこか慰謝料を取られ　同
嚴粛な事実がオギャーと産れ出た　同
スリッパで來て借りて置く氷代　大阪市大門
荷物一個下ろすに止まる小さい駅　同
銀行を出るとすぐさま辻を折れ　同
親の子だからとて飲める組にされ　同
安宿の床にかきつの枯れており　岡山縣十九平
大部屋にスターの夢も醒めかける　同
だし殼の様な女に抱かれて見　同
珍らしい研究ですよと好色史　同
何もせず寢て居て欲しい姑なり　尼崎市ちか子
姑の眼鏡も憎いもののうち　同
姑の咳を聞いても氣がとがり　同
食うだけが樂み姑哀れなり　同
欺された愚痴が何時しか歯を洩れる　岡山縣千富彌
占ひはもう当てにせず落ちて行き　同
不安無く子供は春の子守唄　同
春と言ふ名にもきようの無い生活　同
被害者の女女がかばい合ひ　大阪市沐天
不渡りもそうかと人の氣輕さや　同

## 暑中御伺（柳人交歓のページ）

### 川雜東京支部

客員
福田山雨　石居高志　加藤守夫　武田登志夢　根岸東　植田ひろし　植田千束　山根白星　宮田不二　川村好郎

### 鳥ケ辻川柳会

（イロハ順）

市場沒食子　池戸桃村　井上露芳　西川惠風　辻竹青　若林草右　上林平藏　吉田斜水　田中耕人　多田禿天　津村神峰　中谷葉茶子　牛田晴夫　尾崎方正　太田良子　久保井柳三郎　山本新陽　小沢史葉　足立春雄　酒井紬三郎　木村晩成　水谷竹莊　森下愛論

### 川柳雜誌社篠山支部

（兵庫縣篠山町）

田代尋四
小畠無聖
家沢薺花
小西無鬼

### 川柳白鷺会

大阪市福島区鷺洲中二ノ五
角一ゴム株式会社

谷内一草　塩浜一路
福本翮骨　太田木声
松崎五馬　清沢柳清
布村南扇子　榎南夏六
伊藤迷宮

ボスもまたてんやわんやの世に疲れ　同
税金が税金がとて酷き使ひ　同
いさゝかのたゝひ見せず税吏飲み　呉市史球
轉落と想うてはゐぬガムをかみ　同
履歴書は見もせず野球はやるか君　同
花に似ぬ顔が花束だいて來た　同
意外にも妻押賣をやり込める　石川縣光郎
妾宅の朝を小切手書かされる　同
思想など何んであるうゝダモイの日　同
奥様の意見をそのまゝ部下に言ひ　岡山縣一貫
父の意見足らぬ所は母が言ひ　同
稼ぎ高養父の氣嫌も麗はしく　同
寢不足を言わずに朝の早い母　大阪市葉光
欠伸して幸福と言ふものを思ふ　同
冷淡になつて浮世に強く生き　同
空想の日が結婚へつゞくなり　大阪市草右
四書五經塵にまかせて閣に生き　同
吊皮でふと触合つた異性の手　同
メイデーに軒の小雀巣立せり　倉敷市千代男
空論と聞いては男が立ちませぬ　同
飛込んだボールを叱る老の一徹　同
夢ばかり抱いて女の四十過ぎ　大阪市葦丈子
食ひさがる女死んでやる〳〵　同
新聞の眼を轉ずれば氣が変り　同
更生と名付け掌翻し　今治市文庫
特権階級のつもり角帽離さない　同
万引も減つたが客もぐつと減り　同
貧乏なだけが似ている立志傳　金沢市陽々
廊の灯遠く見ている立志傳　同
二階借子供もソツト降りるなり　同
理論は理論俺はこうして作る麦　愛媛縣旭童
待つてやつておごつてやつてほつまかれ　同
ねる前の化粧とやらに女立ち　同
むつとしたまんまで帰る程に老い　熊本縣鶴堂
スナツプへ少し慌てた未亡人　同
悲しい日女やつぱり化粧する　同
この肌が俺の理性をしびらせた　兵庫縣無聖
ランデブーもうお別れの辻に來た　同
提鞄境界線のように置き　同
不機嫌な日の食卓は片附かず　小松市茶佛
政治家はいいな勝手な嘘が言へ　同
挨拶も碌々出來ぬから行かず　同
此の町に住む嬉しさのだらりおび　宇部市金路郎
こゝからが夫婦となつた写眞帳　同
アパートに居るを國ではあぶなかり　同
政策が同じで君は落選か　佐賀縣えいを
妻糠を浴びつゝ遍路鈴を振り　同

病床にて

稼いでる妻へ氣兼の床に臥し　同
浮名もう消へはて老人茶をすゝる　横浜市智水
ほゝすりをすれば母子に通ふもの　同
虚をつかれた弱みを見せず猪口をさし　同
慰藉料は男の方でとる訴狀　八代市斗四翁
次々の税をきれいに女戸主　同
もう年でなどと愚妻の如すなく　同
金もつて來いの学校に教会に　岡山縣忠美
ピアノから賣るをミシンが先になり　同
追放は古巣の地下が住みよくて　同
公約も狀勢の変化と云うつもり　東京都蛙声
落日をフツトライトの如く浴び　同
理性など最初から無い恋だつた　同
おかしさよ死ぬ氣に金が惜しくなり　米子市鱒三
ためたまゝ次の申告せにやならず　同
こゝ掘れと言ふ犬今頃おらんかいな　同
二号ですと云わぬばかりの柄を着て　石川縣夢晴
尼僧まだ悟り切れない媚を見せ　同


川柳日ノ丸会
鳥取市富安町三八〇
日ノ丸自動車鳥取工場内
電話 鳥取一五三三番

川柳後援會
会長 上山專一
鳥取市東品治町五二番地
日ノ丸自動車株式会社内
電話鳥取一二三〇—三三番

小兒科澤田醫院
沢田四郎作
大阪市西成区玉出本通一丁目一三

南海鐵道株式會社
川柳部一同

川柳雜誌社ハワイ支部
ウイロー社
同人一同

川柳雜姫路支部
白鷺市
姫路
川西柳町
之坪会
荻原二葉
角谷凡夫
狩野燕子
岩崎樹甫
岩崎揚甫
木下和水
大川笑鬼
武田孤笑
夷一笑

誘惑のおぼえある身で子を案じ　同
面会を遅く去なして氣にかゝり　貝塚市千　舟
金策の友が帰らぬビヤホール　同
いゝ年をしてと云はれる本を読み　宇治山田市　卯　門
肩叩く力へ母のうれしそう　同
晴れた空一應ひげを剃っておく　同
寂しさもあり漫然とパフを出し　同
体裁に置くバイブルと友は知り　高知市　笑　羊
母の日と子の日除けば父の日か　同
夏時間どこを歩いて居るのやら　東京郡万　年
捕まつた掏摸の胸にも白い羽根　同
停電の夜から貞操うたがはれ　布　哇純　香
四十の後家に童貞奮はれる　同
少年の夢は孤島のロビンソン　高知市桂　夢
風采があがらないから金が出き　同
恋人にボートのこつを教へられ　滋賀縣季　賛
恋人の金歯に当る初夏の風　同
氣の弱い恋へ女の焦れてゆき　大阪市志　津
新婚の釘打つさえも二人して　同
小使の今日のう〳〵と日曜日　今治市醉　歩
口癖でなく本当に金がない　同
手を振つて歩けば村は風計り　愛知縣吐　平
名判事人を罰した顔もせず　同
一年の集計ようやく上の桁　富山縣三　峯
我が妻は我が職業に不安なし　同
日雇の覚悟も出來て社につとめ　尼崎市紅　山
何ごともあきらめさせる子がひざに　同
初松魚女房お酒を買ひましよか　高知市一徹郎
この松魚生てまつせと値切らせず　同
夏時間やつぱりゆとりない暮し　大阪府きはち
万引をした年頃に同情し　同
老いたとは口だけのものダンスもし　奈良縣笛　生
白浜温泉
千疊岩疲れてるます肌を見せ　同

あの世までの約束やぶれて嫁に行き　大阪市一　昌
もう一度恋してみたい紅をぬり　同
派手なのを出されて自信取返し　熊本縣無　六
眼で招く夜の女へたそがれる　同
解る筈母もロマンスもつてゐた　鳥取市芳　道
新婚は妻を託して御出張　同
競輪が済まねば迷子連れに來ず　岡山市四　案
廣ければ掃除に困ると妻を見る　同
性病の看板を見て時間待ち　滋賀縣木　人
酒の値にふれて夕餉を氣不味くし　同
やくわけぢやないが人目をさけ給へ　鳥取市遊　星
胎教の責任妾ばかりなの　同
あの人だあの足音だはずむ胸　熊本縣月　仙
猫ならばいゝな膝から膝で暮れ　同
もらいてはないかと洋裁通い出し　滋賀縣明
角帽の無智な女を連れており　同
ホトトギス客を起せと鳴き始め　和歌山桑　南
室くじ知つてる人が見て居そう　同
貰い水今朝のお世辞の長い事　岡山縣綠　朗
はつきりとしいなと膝をゆすぶられ　同
招待席蛋が居つたとは言えず　下関市侃　流
一鉋あてたいような足が行く　同
醉へばすぐ寝る癖子等に物足らず　長野縣柳　兒
飲ます段取りまで商談こぎつける　同
雨もよしアベックの旅ならば　大阪市六竜子
本命が何うの斯うのと負け続け　同
女医一人診るたび鏡覗いて見　豊中市直　郎
女子大出給仕上りと駆落ちし　同
賣薬をあわてゝしまう廻診日　貝塚市英　世
特報にいそぎダリヤに副木立て　同
鯉幟風がないのをさびしがり　布施市柏　葉
結局は遅刻になつた忘れ物　同


暑中御伺（柳人交歓のページ）

丸山弓削平
直原七面山
黒田笑泉
福島鉄兒
黒田久米女
直原湖月
片山百郎（北路改メ）

—川雜美作支部弓削川柳社—
上弓削支部一同
羽塩支部一同
全間支部一同
神日支部一同

川柳雜誌社出雲支部　いづも川柳社
代表　尼　絲之助　出雲市高松

川柳雜誌社　岡山支部

川雜吳支部　吉浦川柳会

大阪市東淀川区三津屋北通四丁目二九
武部香林
武部若菜

神戸市（中央局区内）兵庫区神田町七九　電話元町六五八六番
三條東洋樹

奈良縣宇陀郡三本松村
上田翠光

東北の川柳誌一部二〇円
川柳杜人社
仙台市琵琶首町四八　電話二四七〇番　振替仙台一六九六番

二次会の勘定妻にかくしとき　廣島縣愛　鳩
つめよれば税吏視線をそらすなり　同
好きですとこう〳〵先に口切らせ　奥　市梅　香
恋人の母に戰後派とのゝしられ　同
カロリーへ母の生活も樂でなし　岡山縣加　代
指切りまでしたが音信不通なり　同
オールドミス冬春夏とヒスつのり　出雲市まさる
腰の線もう嫁がしていゝ頃よ　同
ホームラン教科書開いたはずで聞き　岡山縣美能留
農繁期花瓶の花は拔いたまゝ　同
十五夜の月へ男も何かいゝ　今治市青　雨
なんぼ言うても同じこと地位でいへ　同
ニユールック着てもあの人見て呉れや　大牟田一　葉
白髪染少しは妻にうたがわれ　同
新らしいママへパパまで肩をもち　熊本縣安　彦
大嫌いなどと愛しており乍ら　同
親の許した仲がさつぱり燃えて來ゃ　大阪市弧　舟
後悔はせぬかノ、とクドイワネ　同
銀行で扇子貰へる程も借り　今治市一　風
次々と習ひものして縁遠し　同
抵当の家へ櫻が眞盛り　貝塚市庸　司
失恋をしたか唄はぬ日がつゞき　同
思い出は今の夫の外にあり　岡山縣牛　歩
自殺したあとへ貰うたのも美人　同
盲愛と氣付かず母は子をかばい　岡山縣梨光江改メ　花
ライバルのあるのを知った花火の夜　同
大いなる母と知りつゝ我は恋ふ　大阪市志乃布
尊敬がどうにもならぬ恋になり　同
仕事手に着かぬ二十の髪のつや　奥　市紅　兒
球審は野次へ満足さすつもり　同

妻子を挙ぐもすぐ死す

思ひ出せと計りに今日も乳が張り　大阪市柳太郎
夫婦ではないのであらふ腕を組み　大阪市惠　風
癇のたつ日に押賣が二三人　大阪市桃　村
意氣投合独身主義が二人寄り　高知縣十四郎
家事のことにかまれず小遣置いて去に　岡山縣梯　梧
雨漏りを直したといふ雨が降り　大阪市二　桂
選挙戰どうあろうとも山は暮れ　迷親子改メ　香川縣安　哲
又伯母と言ふかと叱る後の妻　岡山縣至　孝

夫婦仲

豊作の麦の魅力も薄らいで　鳥取市吾　柳
別れたを忘れる爲に酒を買ひ　鳥取市赤　壁
石段を数えて登るランドセル　山口縣秀　峰
共産党ニタリポスター貼つて去に　岡山縣百　郎
競馬に負けて女房の肩たゝく　鳥取市星　流
カーテンに祝出征の文字が見え　鳥取市宵待草
往き來せぬ事の起りは金のこと　宮崎市外之助
まあ大きな背ネと肩にふれて來る　滋賀縣斗　志
庭つゝじ扇の型に咲き誇り　鳥取市雲　樹
ことづてのついでひやかしで言うて　滋賀縣郁　夫
彼女居た十年前の映画館　鳥取市なぎさ
百合生けてクラスメートを思ひ出し　岡山縣万　月
リコールには勝つて動けぬ金詰り　八代市実　信
さびついたクリップ僕に似てるよう　愛媛縣曉　童
年甲斐もなく美くしい夏姿　鳴門市五里棒
作病でいつも通せる顔に出來　岡山縣夜　潮
草相模一人残して無念そう　大阪市露　草
税金も出來ない庭に花が咲き　鹿兒島華　水
アベックを後から押込むバスガール　岡山縣鴻　峰
琴の音に初恋の味甦り　岡山縣敬　貢
花瓶に納まらぬバケツに見舞が溢れ　新潟縣不　味
失敗がいつしか無口な俺にして　大阪市樂　天
折れて出る氣にもさせない倦怠期　岡山縣良畔子
母さんと呼べない母を持つつらさ　奥　市哲　也


木下幽王
自宅　阿部野区帝塚山西二ノ十二
ダイヨ産業株式会社
電　南一一八六番

新人川柳會
速水眞珠洞
博多下店屋町
電話東三一六一番

折詰料理專門
大阪ブベノ橋柘農街櫻通
大万
電話天王寺三九三五番
松江梅里

大阪市南区疊屋町四十五番地
日本樂器製造株式会社大阪支店
村松夢裡
西いわを

山口縣小郡駅
長野井蛙

東京都千代田区神田美土代町七YMCAホテル
前山北海

客毎に今日の暑さをくりかへし
岸南柳
大阪市阿倍野区天王寺町三〇七一男前製造所

高知市長浜町
岡本雄吉
号元馬

道頓堀川柳会
南区道頓堀角座前
電話南三二二九

川村伊知呂
鳥居金矢
岡村和光一
平井禾午
荒川不退
田名部修三
脇田梅子

# 雑・筆・春・秋

## 煙草に白米

小山文三

六月に行はれた參議院議員選挙の全國区議員候補者には中々むつかしい苗字の士が多かつた。カナコギ（鹿子木）ヘグリ（平郡）クブシロ（久布白）ナカタオ（中畠）キンタカ（金高）ユクボ（柚久保）ニナギ（蜷木）ヤコ（八子）エクマ（江熊）なぞ。又、名前も次の様なむつかしいのがある。

ヒロノリ（博興）クマオキ（熊沖）オチミ（仮名文字）ヨシミ（嘉）ダン（断）バン（番）マノオ（眞乃夫）トライ（虎猪）スケハル（資治）リユウコ（竜湖）フキ（仮名文字）チモ（ク）イネ（イ子）ギカン（義貫）テツオウ（哲翁）等

こんな風だと、つい仮名文字に漢字のルビーを附け度くなるのも人情であつたろう。

筆者の知人の白波漱米吉候補は白米の畧称を用ひて票を集める事に努められたし、小畑候補は煙草の反対だと吹聴して居られた。

これ等は誠に当意即妙で宣傳效果は一〇〇%であつたろう。

凡そ將來議員立候補でも志す者は自分の名を附けるのに、これ迄の様に、生みの親の勝手氣儘な好みのみに任せて置けない様にも思はれる。さりとて生れて間もない十日目位に自ら命名する程の能力もあるまいし、つくづく大昔のお釈迦さんの天上天下唯我独尊の話を羨しく思ふのである。

筆者は幼名を市松と云つたが、さる事情あつて七才にして今のむつかしい名に代へたので今以て電話なぞで名前を傳へるに苦労して居るのである。心ず可きは命名なるかなの嘆が深いのである。

序でながら筆者は此度の選挙開票に立会つたが、立候補もしない而も名もない此筆者の名札が全國区の投票の内から二枚も表れたのには驚いたのであつた。其筆跡が立派なものだつたから、これこそ覚悟の前の無效票を投じたのであろうし、又筆者を、からかつたつもりもあつたのであろう。

それにしても筆者にとりては苦笑しつゝも素より悪い氣持ちもしなかつたのは、持ち前の自惚れ心であつたろうか。呵々

二五・六・一〇記

## 甘党

正本水容選

甘党の社長と会つたテイルーム　燕子
甘党の一家みんなで円くなり　町子

課題　吟

甘党の友がけむたい二日酔　桂夢
甘党のぜんざいやたら甘くする　卯之助
共学の恋が汁粉へ入りけり　惠風
甘党もお酒もいける若さ持ち　斗志
午後三時甘党よつてあみだくじ　季賛
甘党を茶寮の主人覚えとり　娯句洛

## 野梅とコスモス

安川久留美

「この絵画に賛をするよと恐がらせ」は亡き劍花坊の句であつて、賛というものは画の上へ行くものかと思つたら、「小説の泉」四月号扉に吉川英治の句

訪ふ人に何の能なき野梅かな

が、日本でも有名な川合玉堂画の上になつている。昔の川柳人＝吉川英治氏も素晴らし？豪くなつたものだ。

◇

△寐返りをして新しい夢を見るは私の近什凡作

○寐返りの枕台湾程はなれは誰の句？

二句とも自由思想——。

◇

コスモスは秋の花、
スモスコは関西でいうしもたやの事。

郷土史研究家の火友奎堂氏が新聞紙上にかいた、「金沢の家」にふとこんなことを思う。

（五月一日）

## 愛染坂

山本葉光

大阪の夏祭りのトップを切る、勝曼院愛染堂から西へ一丁ほどにある坂だ。私の運命の歯車はこゝから狂ひ出した。私が母とこの坂を通行中に、坂上から空荷車が落ちて來て、私等の逃げた方に梶棒が來て腰部を打ち、余力は人家の壁を抜いて止つた。

## 不朽洞會から

▼國弘半休門氏（下関市）は門鉄局で募集した旅のエチケットに関する川柳の審査に川柳家代表の審査員として出席された▼石曾根民郎氏（松本市）は廿四年度版自選川柳年刊句集を企劃されその第一集を八月に刊行される由▼木村孤浪氏（東京都）は六月末から三週間の予定で北海道へ出張されるとのこと▼高鷲亜鈍氏（大阪市）は詩人藤村青一氏でるが七月十四日に大阪市立文化会館主催の現代詩講座の講師として「現代詩壇の展望」を講じられた▼黒川紫香氏（大阪市）は長女澄子さんを儲けられたおよろこび申上げる▼富士野鞍馬氏（清水市）は全國浴場新聞七月一日発行十七号に「江戸川柳に見る湯屋のノド自慢」を執筆▼佐野卜占氏（八代市）は六月中旬頃からチブス様の高熱で病臥されていたそうであるが七月上旬には平熱に近くなられたとのこと切に加養を祈る▼杉原大研子（大阪市）は心臓病のため阪大附属病院南一階五一号室に入院された▼鈴木九坡氏は岡山縣上道郡西大寺町掛之町へ移られた▼篠山籌彦氏（大阪市）は家事の都合上七月限退会された。

新会員紹介

七月

小畠　無聖氏（兵庫縣）正
　　無鬼氏推薦
田中　遊星氏（鳥取縣）正
　　日淵子氏推薦
西　いわを氏（大阪市）正
　　夢裡氏推薦
高山　朗笑氏（岡山縣）正
杉山　一貫氏（岡山縣）正
家本　富至氏（岡山縣）正
椿部　牛歩氏（岡山縣）正
服部十九平氏（岡山縣）正
大森娯句樂氏（岡山縣）正

以上、七面山氏推薦

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
大阪・武田藥品工業株式會社
45錠入

甘党は甘党で別な手を叩き　実信
ありつたけ飲んで甘党の仲に入り　夜潮
甘党は味を落した店を知り　單波
しるこ屋の隅で甘党の文化論　夏六
ようかんの厚味へつばも打算的　不味
ズルチンを入れて甘党もてなす氣　芳泉
珍客にされ甘党の困るなり　愛鳩
祝宴に甘党別間に寄つて居り　一貫
みつ豆を喰べて土産を考える　拓志
甘党へちよつぴり酌いで手酌なり　光郎
あみだくじ甘党だけのひる休み　鉄兒
甘党で辛棒させた戎橋　柏葉
甘党の母へ名産さとう漬け　青雨
胃散片手に甘党の へ理屈　淑郎
甘党にも辛党にもなる女將　十九平
ズルチンも少しは混ぜた母の餅　醉月
甘党へ老妓ちよつぴり同情し　千代男
甘党はしやべり足りなく店を出る　葦丈子
甘党と連れ立つ夫に安心し　蛙声
甘党の妻へ夫も從いて行き　茶々
甘党で小唄もちよつゝ歌います　忠美
甘党としての存在認められ　葵羊
甘党同志もう二次会をはぐれて來　柳亭
甘党も予算に入れた酒の量　七面山
甘党の女ばかしの賑しさ　湖月
一切のようかん甘党らしくたべ　智水
カフエーでペパーミントを笑われる　十四郎
カロリーもくわしく甘党胃弱なり　安彦
おしるこで幸福だつたあの頃よ　純香
ぜんざいはぜんざい酒は酒で好き　斗四翁
甘党の盃ばかりためて醉ひ　吐平
甘い物こさえときます念を押し　北路
ぜんざいで互ひの不運なぐさめる　一風
甘党の叔父へ子供のなついてき　美秋

甘いのもいけまんれんさ好かん奴　弧舟
甘党の夫へ飲める母があり　牛歩
甘党の婿で身はものたらず　孤峰
甘党は席のあくのをじつと待ち　北海
幸福な恋で甘党になりましよう　葉光
甘党と聞いてダンサーうちさげる　古峰
甘党は甘党らしい持論にて　眞歩
抱きあげた子のあめ玉を一つごり　史球
甘党のあいつに送るものを入れ　甦光
甘党の客をさかなに一人醉ひ　華水
甘党に盃させばついでくれ　同
甘党の父が醉うてる目出度い日　齋花
甘党にそれ〳〵ひいきのおしるこ屋　正一
甘党に誘われて行く喫茶店　笑泉
餅菓子の屑をこぼして聖書読む　關骨
老夫型と話があつて菓子の折　粗影
甘党の友をあわれむ大ジョッキ　芦穂
い、年をしてキヤラメルを切らさない　滿年
ぜんざいと書く日が続く小道帳　醉歩
甘酒の茶碗がでかい雨風屋　山雨楼
小豆煮るこつも夫に教えられ　正司
焼跡へ昔のまゝの甘党屋　白渓子
遠足の生徒で混んでる甘党屋　同
吉報へ甘いのもよし酒もよし　曉明
甘党へ少しはお飲みなさいませ　淡舟
甘党の趣味德利の焼きを当て　正則
佳甘党がおごつてやろうと云う景氣　苑女
佳甘党の席へほろ醉ひ顔を出し　翠柳
佳甘党のつきあいも出來いゝ課長　曉明
佳甘党が醉うて帰つて案じられ　淡舟
佳甘党のテーブル子供の決めた場所　正則
佳甘党と知らぬ者なき常務なり　日滿子
佳甘党の肚わからない奴にする　同
軸甘党の店へ自轉車あずけて來　同

空襲事の梶棒を摑へてすべり落ちて來た少年の顏面は鼻もない血染めのズンベラで、氣を失つてゐた。母は私を背にすゞ手当を受けて治ると、小学校一年生に入学した。

一年の冬休みに耳を患ひ休学したが、二年生は皆勤賞を貰い、三年生の冬休みから治つてゐたと思つた腰部は脚部をも痛め歩行が止まつた。が再び治つて歩行が出來る様になつて、阿倍野の鳥潟病院で診て貰らひ登校しようとしたが、打撲による骨膜炎で手術をしなくてはならぬと言われた。生命の保証はして呉れなかつたから、そのまゝで町医者の療治や灸、鍼、祈禱等による長期病となつてしまつた。その間松葉杖で歩行が出來るようにもなつたが、万年床での生活が多くなつてしまつた。義務教育を受けてゐないので、先ず文字を読む事を熱心にした。そして少年雑誌等を多読した、短文学に投書する樂しみを知つた。川柳を知つたのは、父が亡くなつた年で、早くも二十年の年月が過ぎ去つてしまつた。

風邪を引けばアスピリンを服み、腹を痛めると、胃腸薬を服むぐらいで、精神修養にもつとも適した川柳を中心として、短文学に熱中する事が私の宗教になつてしまつた。

今では最後の川柳だけで、自分を忘れて、川柳愛だけに打ち込めるようになつてしまつた。尚、愛染坂は交通的な事故がその後も続いてゐたので、金が出來たらこの坂を修理する事が念願であつたが、戦災で人家は焼失したので再び事故をおこさない区劃整理が十分に出來るだろう事を願つてゐる。


暑中御伺（柳人交歡のページ）

川柳雑誌社

麻生路郎
麻生葭乃
麻生POE
麻生梨里

中島生々庵
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
電話南三九八四番
自宅　堺市浜寺諏訪森西三丁
電話浜寺八二四番

平塚市馬入二九〇九
木村孤浪

戸倉普天
兵庫縣氷上郡沼貫村小野

いのちある句を創れ

# 俳句地帯

投稿清規 ▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

## 柳秀忌句會（本社）

六月三日　於　大宝文化会館

柳秀・長崎仙太郎博士が昭和廿年六月五日御影の自邸の壕内で亡くなられてから満五年を迎えたので柳秀忌を修した。兼題選は故人に関係の深い路郎師、春巣氏、栞氏等によって行はれ、路郎師は「柳秀を語る」と題し、故人の経歴、柳歴逸話等を談され、春巣、栞両氏は故人の思ひ出を談された。当夜は弓創からの七面山、笑泉両氏も出席され緊張した句会を持つことが出来た。（幹事）

出席者＝路郎・梅志・青丹子・豆秋・春柳・鮎美・文蝶・種美・靖眞・幽王・修三・鬱骨・七面山・笑泉・寒句・淡舟・蝉々・怒留八・三司・万樂・正司・季賛・受論・片穂・柳亭・春巣・笛生・春草・哲水・繻彦・瓜平・翠光・白香・夢裡・緣雨・生々庵・晴峯・亜鈍・梅里・俊惠・野介・小雅子・小松園・花村・栞・葭乃・梨里

兼題「大学」　麻生路郎選

米亡人子の大学が口につき　春巣
大学へ通はれ〳〵ている世帯　種美
大学のストも左右に別れて居　春草
僑大学生香水の匂ひする　淡舟
六法の虜となつて大学出　栞
大学をビリで出たとは書いてなし　翠光
大学の芝生は燃ゆる若さよし　野介
大学が仇か詩人で生きんとす　亜鈍
入党が知れて学資が来なくなり　哲水
大学を出たが巡査は巡査なり　三司
大学は出たが英語はもう忘れ　路郎

兼題「袂」　西尾　栞選

あの袂恋の罠とは知らなんだ　夢裡
お芝居の様に袂で送られる　笛生
袂ふくろびて喧嘩の手がにぶり　美秋
繕す袂は恋を意識する　翠光
市場から袂でかくすものを買ひ　寒句
逢曳の袂に風が来て青葉　鬱骨
袂から去年の宝くじの空ら　万樂
舞委生きてる様な袂なり　一貫
美しい妬みのポーズ袂抱く　野介
嬉しさの袂をそつと胸に抱き　葉光
紋付の袂から出た結び昆布　修三
委見へ嬉しく袂二度三度　愛論
袂かんでお園のなげき糸にのり　寒句
袂にも血の通ふてる舞委　一貫
袂やがて元の姿に舞ひおさめ　生々庵
思いきり袂の下でにぎられる　柳清
青祭袂たもとがすれ違い　晴峯
錦紗の袂でたいてチップ五百円　栞

兼題「金魚」　北川春巣選

新世帯金魚をかつてのどかな日　季賛
金魚買り病む兒の家へさしかゝり　幽王
氣に食はぬ顔か金魚は向きを変へ　七面山
猫の目が金魚の夢をおびやかし　春柳
まさもに見れはランチユウサタンめき　栞
金魚うり元氣のいゝのを頼まれる　梅志
親善の使命金魚の海を越へ　美秋
お土産に買ふた金魚を持て余し　笑泉
ロングスカートよりも長く錦魚腰を振り　満年
金魚買ふどうせ育たぬ金魚買ふ　翠光
妾宅の金魚はおいしそうに見え　鮎美
父親が金魚掬ひへ意地を出し　梅里
金魚屋の戦後五年の声となり　栞
一匹になつた金魚へ梅雨があけ　小雅子
オカッパへ金魚屋小さいのまけてやり　晴峯
店先で金魚はせまい暮しする　笛生
外國へ金魚日本の良さを見せ　同
金魚買り松鶴高座を夏にする　三司
夜店の灯金魚うつかり眠うなり　葉光
金魚鉢きれいな順に死んでゆき　豆秋
やつと食う生活の中の金魚鉢　万樂
俺に似た姿であえぐ金魚鉢　生々庵
病人が金魚の水の指図する　春巣

席題「徹夜」　橋本緣雨選

夜徹した愚痴は煙草の借りが出来　万樂
徹夜した看護婦を越えたらし　淡舟
徹夜してのんだと言えぬ二日酔　春柳
徹夜した朝の電車の搖れ心地　柳亭
徹夜する父へ弁当届けられ　青丹子
徹夜した線路工夫の去に仕度　修三
徹夜した窓から朝の陽がこぼれ　小雅子
徹夜した朝風呂貫々へのつてみる　哲水
徹夜するかくごで火鉢へ炭をつぎ　三司
徹夜して出来た決算赤字なり　春草
徹夜から戻れば妻は病んで居り　緣雨

席題「横事」　土井文蝶選

燐はれて居ると知つての横事　寒句
横事共産党と違います　笛声
横事すすめた酒のほろ苦がし　春草
横事言い〳〵汗をふいてゐる　笑泉
大綱もニセものにする横事　春柳
横事押しても税金とりにくる　小雅子
横事まかせられても困るなり　花村
横事入れるつもりの席につき　正司
横事大阪弁でよく粘り　万樂
横事議長煙たい顔になり　片穂
横事新聞記者には向きをかへ　繻彦
兄さんの恋へ小さな横事　正司
横事満堂の瞳浴びてゐる　幽王
横事罠にかゝつた眼がきつし　鮎美
決心がついた処へ茶々を入れ　鬱骨
美しい声に横やり慌てだし　愛論
家のない辛さにしのぶ横事　瓜平
横事ひさし三尺はみ出して　野介
のぞかせるいれずみ横へおす氣なり　晴峯
横事女世帯とみくびられ　青丹子
なだめると大声を出す横事　豆秋
横事女房だけがきいてくれ　梅志

## 大阪南支部句會（大阪）

雑川　六月十七日　於阿倍王子神社

夏祭・うなぎ・螢・独身・暴力
お渡りのある道筋は水を打ち　葉光
鉢巻の迷ひ兒もある夏祭　豆秋
橋へ来て神輿は高く上げられる　志津
夏祭今年は一人ふえました　鬱骨
ビールビール祭囃子で寝てしまい　迷宮
涼しげに髪結うてくる夏祭　苑女
夏祭金魚すくいをして帰り　春柳
夏祭扇子へ一句墨をすり　鮎美
献燈の墨新らしい夏祭　梅里
夏祭り船場育ちの愚痴を聞き　同
靴磨きの子供もまじる夏祭　竹荘
無心なる長い袂の夏祭り　亜鈍
動くオモチヤみな動かして夏祭　晴峰
烈日へ日傘日傘の夏祭　一草
男性美おみこしさんがよく暴れ　豆秋
へボ將棋へつして笑う夏祭　路郎
廓形の浴衣が眼立つ夏祭　同
ビールならと女まで呑む夏祭　同
夏祭開襟シャツのまゝでする　万樂
八幡卷程度のうなぎ釣つてくる　豆秋
うなぎ焼くけむりは街へあおぎ出し　七面山
あんたの様だと女うなぎを指してゐる　梅里
牛助と豆腐ですます土用丑　同
栄養はとりたし鰻手が出ない　同
鰻の子哀れ午芳に身をまかせ　万太郎
万太郎読む鼻先へ螢籠　鬱骨

病める兒に瞳のとどく螢籠　梅里
泉水の螢見ているいゝ暮し　竹莊
螢追ふ闇に素足のほの白く　亜炎
紙帳越しに螢飛交ふ旅の宿　野介
生きて欲しく夜なく光れ螢の灯　亜鈍
寛いだこゝろへ螢二三四　万樂
きりふけばぱつと火の点く螢籠　春柳
夕立のあとを螢の二三四　文蝶
湯の宿の手すりで二人螢見る　竹莊
ふるさとの螢よとんで帰りたし　豆秋
一泊と決めて落ちつく螢狩　万樂
石山の螢を提げた朝帰り　鮎美
にごうさん靈の螢のさびしすぎ　同
独身にも一度なりたいむこ養子　昌子
独身の女に高い利子で借り　豆秋
独身でとほす覚悟の髪を結び　梅里
独身で女教師のスキヤンダル　晴峯
独身を防えば裏手で釘の音　万樂
独り身の酢蛸を隣りから貰ひ　鮎美
独身がほんとに辛い宵のうち　昌子
独り身のせうこりもなく灯にうごき　鮎美
ピストルの音に暴力團逃げる　竹莊
暴力へダモイしづかに胸を張り　鮎美
暴力へ屈せぬ思想シカと座し　晴峰
女將もう暴力團に慣れ切つて　野介
暴力の前に理性がくづれかけ　梅里
運轉手の外に用心棒を連れ　万樂
時計までとられ頭にコブが出來　豆秋
暴力は止せとビールの栓を抜き　文蝶

雜川　**東京支部句會**（東京都）

創立一周年記念　於 鳥野ビル三階
五月五日　川村好郎報

一年・金魚・恩・ギヨツ・別れ・ハイキング

一周忌までは健氣な未亡人　好郎
独り身は一年待つもどかしく　高志
あなたからパパに変つた一年目　白星
まな板のくぼみも添つて一年目　同
開店一周年もう店員誰も居ず　好郎
宿題がすむまでのける金魚鉢　不二
生前の趣味を偲ばす金魚鉢　高志
散髪を待つ間金魚の鉢に佇ち　不二
妾宅の金魚貴族の様に見え　登志
金魚寮り掃除の町はよけて行き　不二
たまゆらの生命を金魚ひるがへり　白星
恩人の家が吹雪にまだ見える　同
一献の酒につながる恩もあり　高志
恩かけて古い手だけどくどいてみ　東夢
報恩のやれ謝恩のとよく儲け　不二
恩は恩手形の期日告げにくる　同
恩は忘れませんと忘れませんと借りつゞけ　好郎
審査がばれてギヨ〳〵ではすまされず　高志
ギヨツといふ父を母さん眼で叱り　白星
ギヨツですわと軽く緣談はねられる　高志
別れはるなら死んでこまるといふキツス　不二
旅の宿別れをおしむ事故一つ　東夢
手を切つて了つた後に残る味　高志
別れ道男は矢張り先に行き　守夫
サヨナラはもう三回も言つており　高志
発車ベルあきらめかけてまた走り　白星
別れると人にはあつさり言つてのけ　守夫
別れては生きてはゆけぬとこまで來　東夢
愛してゐるとはつきり知つた別れ際　高志
ハンキングこゝろんだとこで飯にする　白星
接吻のチヤンスもなかつたハイキング　好郎
ターザンの眞似もしてゐるハイキング　不二
ハイキングの自動シヤツターが欲しいなり　白星
ハイキングの業事に課長の寄附も入れ　登志
溪流に手を貸す幸もハイキング　不二
ハイキング実は銀座で逸つており　好郎
プランでは日帰りだつたハイキング　高志
かんづめをあけてさすねるハイキング　白星
ハイキング若いリズムに合ふ歩調　不二
ハイキング空氣に味のある跳め　同
落伍同志一杯やつてるハイキング　好郎
ハイキング思出の山さは子は知らず　守夫
買出しに來たこさもありこのコース　好郎

雜川　**出雲支部句會**（出雲）

五月六日　於 原つれを居
尼　緣之助報

失踪・自轉車・新茶・夢・悲觀

自轉車に口笛乘せて嬉しい日　独仙
自轉車の灯が踊り來る並木路　草紙
自轉車をよける日傘のあわてよう　緣之助
妻の失踪日記はみじめなり　同
姙娠となつて失踪帰つて來　まさる
暦を許した夢は通り過ぎ　吐泉
世界連邦大きな夢の一つなり　へとち
どん底の悲觀かくしてほゝえみぬ　つれを
子の意志が僕にもむいた初夏の雨　壯
新茶の香やはり日本はよきものぞ　緣之助

雜川　**ウイロウ社句會**（ハワイ）

四月二日　於 商工会議所

花祭・日記・パイプ

花祭二世の母が掌を合せ　紫水
御佛も僧も美男の花祭　草一郎
花祭子供の藝も堂に入り　流水
世の移り二世が重の花祭　快夢起
ピクニック氣分で一家花祭　泉水
アルバムが語る彼女と花祭　曉舟
花祭婆婆へ未練がなほ残り　亭駒
花祭やつぱりフラに人氣あり　同
花祭ほとけの子等は舞ひ唄ひ　煙波
新妻と初出はたしか花祭　一牛
土人まで釈迦の御弟子と花祭　河舟
花祭済んで迷子一人居る　魔花麗
花祭で逸つて別れてそれつきり　同
せち辛い婆婆とも見えず花祭　純香
老の眼をしばたゝかせてる花祭　同
アラモアナ人も車も花の山　拜山
極樂もかくやと思ふ花祭　芳雨
日記にも何日〳〵逸つた書いてあり　泉水
旅日記祇園のグラリ見えるよう　快夢起
くすぐつたい想出もある古日記　曉翠
伏せ字など入れて樂しい旅日記　同
認めるつもりで買つた日記帳　魔花麗
過去の汗火きくしみる日記帳　流水
パイプなど撫でゝ自慢の一くさり　曉翠
反り返る社長のパイプ太く見え　快夢起
置き忘れパイプを探す年となり　伯米
帳尻が合はずパイプをやけに噛み　曉舟
御自慢のパイプの由來語り出し　河舟

雜川　**大牟田支部句會**（大牟田市）

五月廿日　於 三菱保安課
高田抱逸報

夏帽子・逃足・辭職・白髮染・椅子

ボンベーの街を知つてるヘルメット　抱逸
戰後派に嫁われそうな一文字　同
夏帽子恩師は昔の儘でいる　扇波
蚤一匹たかまが原を飛越える　抱逸
振り上げた拳へ逃げた子の早さ　つれを
辭職した事には触れず金を借り　一葉
辭職から秘書との恋が知れわたり　抱逸
折鞄貰つたばかりに総辭職　亀水
髮染めているとは今更申されず　つれを
來年は市議になる氣の白髮染　抱逸
貴賓椅子年に一二度使われる　十時
子の椅子でP・T・Aは審議する　扇波

雜川　**岡山支部句會**（岡山縣）

五月二十日　於 弘済会ハウス
藤本満年報

若葉・競輪・石・落選・轉落・ポンプ

若葉　大甲帽　満年
遠足の列が若葉に見えかくれ　七面山
法廷の被告へ若葉目にしみる　久米雄
フラ〳〵と掏つて見たが若葉頃　利明
若葉若葉愉快な旅が続きそう　正一
競輪へいつかは家も賣る氣らし　紫月
競輪と知らず弁当渡される　淑郎
ミス競輪アブレゲールの晴れ姿　加代
競輪をたゞスポーツと見て帰り　満年
競輪のピラは足だけ派手に書き　耕雪
急ぐ身を庭の小石に轉ばされ　七面山
石かんだ途端の額が見つめられ　久米雄
投げ上げた石へ鳥居の高すぎる　利明
石蹴れば鼻緒のだらい宿の下駄　風來子
石ころの路いたわりきハイヒール　千富獅


版写謄田阪

大阪市北区芝田町二五

株式会社　阪田商会

電話　五六三三
福島一九九五番
一四番

西日本鉄道人川柳大会　於廣鉄廿日市職員会館

落選はしたが票数ありがたし　風來子
落ちた身になつてあげたい開票日　良畔子
着飾つて見ても轉落見抜かれる　風來子
令嬢と呼ばれた過去を持つ女　大甲帽
掌をみせ轉落を励まされ　聰夢

野次馬をボンブの水が押し分ける　忠美
消えた頃やつとボンブが水をはき　同
ボンブにもホコリが積んで無事な町　大甲帽

川雑　**貴生川支部句會**（滋賀縣）
五月二十七日　黄瀬美秋報

ボート・金箔・鞄・甘党
誘惑と知りつゝボートに誘はれて　文子
貸ボート一人で乗つてやけのやう　斗志
天神橋恋のボートに氣を取られ　春巣
ボート還らず哀愁の湖が暮れ　杜的
海兵のなごりオールの鮮やかさ　美秋
OKの合図に金箔ちらと見せ　木人
商才の金箔を見せてよく笑い　杜的
金箔までアリ〳〵と見るかぶりつき　春巣
お化粧の崩れぬ程度に泣いておき　美秋
わがまゝの涙が通る十八九　木人
薄給と思へぬ鞄提げて出る　文子
恋人と歩けば鞄邪魔になり　春巣
兄弟でタライ廻しの皮鞄　木人
首切りの日の提鞄淋し過ぎ　斗志
甘党屋くゞれば今のタイピスト　杜的
甘党で彼氏のけちん坊見破られ　都夫
甘党と言ふて交際ことはられ　文子
甘いもの好きの養子でつゝがなし　美秋

川雑　**姫路支部句會**（姫路市）
五月六日　於樹市居　和水報

傘・メーデー・刺身・カメラ・偽札
出勤に傘を持たせるこつも知り　樹市
曇後晴傘を忘れて帰つて來　和水
日曜日傘がないので寐てやらう　燕子
メーデーに出たことにして種をまき　孤笑
メーデーの唄声ビルの窓があき　揚市
夕飯へ刺身の数が少なすぎ　和水
おまかせにすれば刺身を出してくる　一笑
お刺身は昨日の色の屋台店　同
ピンボケも記念のために貼っておき　和水
ピクニック父は写眞機だけを持ち　同
カメラ向けてまあ失礼とさなられる　燕子
シャッターの音が聞えてから笑ひ　一笑
せちがらい偽札も出る金づまり　二葉
手の切れる千円札がきらはれる　孤笑
偽札とちがひますかと云へる仲　一笑

川雑　**弓削支部句會**（岡山縣）
五月六日　於中学校　弓削平報

得心・戻る・家計簿・名刺
得心がゆく迄妻に云はしとき　牛歩
得心をするもしないもない二人　老骨
得心できた新妻の共稼ぎ　久米女
得心のゆかぬ手土産置いて去に　茶々
落選をしたは夜汽車で戻つて來　牛歩
戻らうと思つた時は子を孕み　小宮山
ダンスして戻れば母の手内職　兎女
戻りには寄る氣寄らせる氣で別れ　娯句樂
面目が戻りたい子を寄せつけず　久米女
蜂にさゝれて末ッ子戻つて來　笑泉
薬代ない家計簿の幸福さ　久米女
言ふことがなくて家計の事に触れ　七面山
きつちりと書けば家計簿怖くなり　弓削平
田舎出の娘名刺を力にし　麦秋
名妓笑つて帯に挾みし我名刺　七面山
吾輩の名刺だ泥に踏まれてい　弓削平
仮名つけた名刺落選記念です　富至

川雑　**竹原支部句會**（廣島縣）
五月二十日　於葉留路居　弘津柳慶報

窓・畫寢・髪・青空
通勤が樂しい窓の恋が出來　愛鳩
獄窓は元大臣も來るところ　可笑
飾り窓ズラリサラリーでは足らず　葉留路
だき上げて名残をおしむ汽車の窓　和郎
全快も近く春の窓をあけ　柳慶
窓あけて今日は見えない人思ふ　あきら
養生の爲の畫寢と云つて置こ　芳泉
無雑作に束ねて母は老ひたまい　同
白髪など抜いて貰つて春うらゝ　柳慶
乱れ髪束ねてタバコ買ひに出る　愛鳩
あゝも結ひこうも結ひして十八九　可笑
青空も嬉しい今日の初出社　芳泉

川雑　**吳支部句會**（吳市）
五月六日　於甦光居

しびれ・化粧・バス・雷
子に貸した膝がしびれた三等車　紅兒
初対面しびれて立てぬ間の悪さ　あざみ
お見合の相手もしびれてる様子　瞳


母袋未知庵著
**川柳信濃國**
信濃へあこがれを持つ人は多いが、ホントの信濃を知つてる人は尠ない。先づ本書によつて江戸文学から、信濃を探れ！ B6 三〇〇頁 二三〇円 〒二〇円
發行所　しなの川柳社
松本市大名町七二


しびれてる足へ急用仰せつけ　彩峰
化粧やけ何時かなしんだ此の世界　寧子
念入りにしたお化粧へ空模様　甦光
共学へ少しクリームつけて行く　同
田舎バス隣の用も聞いて乗り　高馬
雷はワルツの足をくるわせる　史球
春雷に恋路の夢を破られる　寧子
雷がロマンス生んだ山の小屋　昔柳
雷へ兄弟喧嘩しばしやめ　哲也
雷の以後大胆な恋となり　梅香

川雑　**岡山支部句會**（岡山市）
六月三日　於学生食堂三階　大森風來子報

生ビール・解剖・屋上・大掃除
唇の赤さジョッキにつけて酔い　風來子
サンマータイムもいゝなと思ふ生ビール　淑郎
ネクタイは歪んでてよい生ビール　聰夢
千円をくだく積りの生ビール　淑郎
のど佛ごくん〳〵と生ビール　満年
解剖のその手で一寸煙草にし　忠美
解剖の結果二人は清かつた　北星
解剖を望む遺書あり静かな死　淑郎
花の下くぐり解剖室へ着き　北星
ほとばしる血もなく解剖台の冷え　正一
屋上の一人へ雲が雲が飛ぶ　淑郎
打明ける氣で屋上へ誘い出し　聰夢
大掃除今日は夫を指図する　壽子
ほんとうの顔で娼婦は朝を掃き　風來子
鉛筆で米一升の無心なり　同

課長すぐ赤鉛筆を持ちたがり　同川

雑　**愛知支部句會**（愛知縣）

六月九日　於久平居　津川竹坊報

蚤・鋸

税務署も錆鋸は押えかれ　北雷
鋸屑け増えたが会社やせて行く　山太郎
鋸の刃が欠けたよな五十過ぎ　同
鋸屋ベコ〳〵させて客に出し　夢佛
腰巻の裏へ裏へと蚤は逃げ　竹坊

**西日本鐵道人川柳大會**

四月二十三日　於廿日市職員会館

人間

身一つになつて人間やり直し　九呂平
日陰者となるを覚悟の子を育て　白葉
人間の勝手へ鶯が一羽減り　久米雄
人間の図太さ不貞寝なぞをして　一象
人間であり鬼であり金を貸し　路秋
人間は孤独になると自己を責め　山雨楼
永らへて人間天皇に出す國旗　巻雲兒
人間の値打ちを犬に見つめられ　陽露子
平凡な男で妻に腹を立て　正一
父のくせいゝ人間になつてくれ　忍
山奥の此処にも人が住む煙　青丹子
人間の動物性がつとこわへ　春巣
灯ともして或る日は神の如く在り　蟲堂
裏表ない人間とまかさられ　十進
孤々の声あげて三十八年何をした　大次
人間のいろわけ金がつけてくれ　博

札束で賣れる人間にもなれず　農天
人間の嘘は柏手鳴らしとき　久米雄
幸福に馴れて人間性が消え　こうき
共通の弱点があり猪口の数　蘇堂
人間は終点へ来てうろたえる　山雨楼
眞人間らしく話して閣屋降り　春巣
人間の弱さは天理教にこり　穂波
眞人間でありたい悲願朝の粥　伯峯
人間が変つたように花を植え　水客
君とあればわれは痴人の部に属し　路郎

――路郎選のみ発表――

**交通局川柳句會**（大阪）

六月九日　於天王寺仮泊所　富岡淡舟報

愛情・暴風雨・お祇・冷飯

乏しきに耐えて愛情盛りあがり　胡蝶
愛情のくだもの籠は灯をあつめ　鮎美
愛情の涙拭はぬ大映し　芦穂
救はれぬ沖をみつめる暴風雨　小雅子
お祇を言ふてそれからまた頼み　翠芳
馬鹿になり切つて御祇を云うて見た　胡蝶
これしきの祇デパートの筆を借り　芦穂
御丁寧頭をあげぬ祇にあひ　芳人
御祇言ふ事も忘れた久し振り　小柳子
冷飯に馴れて守衛の窓で喰ひ　正則
外来だんれと冷飯つぎこぼし　胡蝶
冷飯の独りへ金魚賣りの声　鮎美

**南海電鐵川柳會**（大阪）

六月二十二日　於南海電鉄三階　友淵貴山報

傘・電話

傘の水たらすも歌舞伎の藝の内　烏莊
人待ち顔傘をさしたりすぼめたり　瞬子
日傘くる〳〵あの人のおそいこと　水鏡
外れるか知らぬが傘を持つて出る　烏莊
雨よ降れ相合傘にもつと降れ　貴山
電話口予期した事を聞かされる　烏莊
此の声が分らぬ女にくゝなり　水鏡
冗談も云ひ儲けてる電話口　貴山
税金の話になつた電話口　同
長距離の電話にうれし國訛　同
借電話氣兼れをしてる様でなし　烏莊
商談が纏るとこで電話切れ　瞬子

**日ノ丸句會**（鳥取市）

五月二十六日　於前社長宅　河村日潤子報

庭・車掌・子沢山・社長

庭の松興亡の跡じつと見て　壽明
洋館に庭はやつぱり日本趣味　遊星
三代目庭は次第に荒れてゆき　秋男
比べもんになりませんわと庭を褒め　日潤子
公休の日でも車掌の癖が出て　至高
車掌とは見えぬ癖りのめかしやう　芳道
咽喉もとの怒り押へて車掌詫び　日潤子
言ひ返したれと車掌に味方する　同
細うでていやに頑張る子沢山　栄夫
玄関のおもちやで解る子沢山　星雨
國の爲といはれた頃の子沢山　遊星
子が九人ありますのよと老けて居や　日潤子

社長さん貴男も税務署怖いかれ　窓雨
子守りする親爺社長と思はれず　至高
もう出るぞ社長の拙い安來節　遊星
又ストか今の社員は生意氣だ　宵待草

五月二十三日　於工場事務所

傘・旅

傘はなし止むまで將棋でも指そか　芳道
旅の空みんな家路に急ぐやう　柳窓
初旅とスリは目覚とくにらんだり　芳道

**岡山縣廳川柳會**

五月二十日　於教養館

煙草

煙草をと無心の言える仲であり　曙雪
賣店の娘が出て急にピースにし　中山子
禁煙の掲示尻目にボスは喫ひ　十九平

南区医師会　**川柳同好會**（大阪）

六月二十日　於無名林居

涙・滑瑠璃・三味線

それからは涙も出ない日がつゞき　捨舟
泣きじやくり少々嘘もまぜ　告げ　無名林
今度こそ涙の効かぬこれよう　捨舟
せめてもの孝行滑瑠璃聞いてやり　生々庵
三勝がおはこでアブレの娘さ合はす　捨舟
所望なりさわりだけでもやるさしよう　無名林
三味線が好きか何方が好きなのか　欣三
炭坑節の外は弾けぬと云ふ藝者　無名林
三味線を持てば師匠の顔になり　生々庵

# 動★静

▼本社七月句会は一日午後五時半から大宝文化会館三階で開催▼大阪逓信病院川柳会は七月十五日午後二時から三階面書室で開催▼南区医師会文化部川柳会は七月廿一日午後七時から迷路居で開催▼南海鉄道川柳会は七月廿六日午後五時半から羽衣海岸南海高等学校で開催以上何れも路郎主幹出席▼川雑美作支部上弓削句会（岡山縣）では大家無患子氏が夕刊山陽第一席に入賞祝賀の句会を開催した▼川雑岡山支部句会は六月廿四日弘済会ハウスで開催された久米雄氏出席▼川雑貴生川支部句会は六月廿四日美秋居で開催▼春巣氏出席▼体温川柳会（貝塚市）は六月廿五日千石荘で開催▼長崎川柳社では玉園幼稚園で六月廿四日紙芝居を見る会を催された▼門鉄局主催の族のエチケット川柳で素人氏は三等に侃流氏は十秀に入選されたと▼山沢英雄氏（川口市）は「誹風柳多留」（一）の校訂され、東都岩波書店から上梓された、原句と前句を照合されてある点、この種の最高権威の書であることは喋々を要しないであろう▼番傘川柳社は同人制に組織変更と共に社名を南区北桃谷町七一川村方へ移轉。▼大森娯句樂氏（岡山縣）は山陽本線熊山駅長に栄轉された▼清水光江さん（岡山縣）は悠貴女と改号▼山田季養氏は廣島縣安佐郡可部局区内亀山村綾ヶ谷山田登方へ轉住された▼廣瀬恒太氏（日田市）は矢立を提げてカ重筌ノ口温泉を歩き廻つていられるとのこと。

川柳　**不朽洞會員に告ぐ**

本会員、上田翠光氏飯降白香女史により奈良縣宇陀郡三本松村向淵に恩師麻生路郎先生の句碑が、六月三日に建設されましたので、句碑建設祝賀句会を来る八月十二日（土）午後八時から翌十三日へかけて開催することとなりました。不朽洞会員は誘つて、この不朽の祝典に参会されんことを切望いたします。準備の都合がありますので出欠の有無をお知らせ願います。

川柳不朽洞會

ビヤホール
みどり
上六交叉点角西北

高級化粧料容器には驚嘆！
ヤマキンの……
黒硝子
大阪南大学区長柳四通一丁目四番
山銀株式會社
電話堀川四四七番

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿五年八月一日第三種郵便物認可
（毎月一回一日発行）劇刊大正十三年・通巻二百七十九号

## 編輯室にて

▼私は誰でせう？　よりも、すぐ隣りの戰爭はどうなるのでせう？の方が私たちにとつて関心を持つ。私たちはそれほど戰爭にコリコリしている。第三次世界戰爭は、おそかれ早かれおこるであろうが私たちはいつまで第二次世界戰爭の俘虜生活を続ければならないのであろうか。オキユパイドジヤパンに軟禁されていることを既に忘れかけている人たちさえあるのに。あるワクの中で自由を叫んでいるほど哀れな存在はない。しかし、そのワクがどれほどひろげられても、より以上に不自由を感じるのが人間の持前かも知れない。そこに戰爭惹起の必然性があるのであろう。それを私たちの文化運動で、どれだけカバーすることが出來るかは疑問であるが、火事が危險であるからと云つてマツチを私たちの生活から追放することが出來ないように、私たちは戰爭の暴力の前に、文化の力を見失うことは出來ない。私たちは川柳文化によつて何処までも心の安住地を確保して行きたい。▼本号の表紙も、由比種三郎画伯を煩わした。

句評、川柳街」は前田伍健、福田山雨楼、大西八歩の三氏それ〴〵適評であることは云うまでもない。味読を乞ふ。▼前田伍健氏の執筆された「伊予方言　どうぞ、なもし」は興味が深い。自分は各地の方言に対して非常に興味を持つているので、永年、蒐集もしているが、何と云つても、その土地の人に訊くより外に方法はないので、安川久留美氏に金沢方言を履田竹林氏に静岡方言をと云つた風に、それ〴〵の方言を紹介して貰いたいと思つている。同時に方言をうまくとりいれた川柳を附してもらいたい。女傑であり、川柳のすぐれた女流作家であつた貴志子女史が六月十五日に永眠された。昨春、葭乃と一緒に、新村の仮寓の病床を訪れたのが最後だつたと思うと残念でならない。少し寸暇を得たら女史の廿余年の川柳生活を書いて見たいと思つている。▼数年前から農生活に轉換したR氏の通信によると「農経済も日日にきうくつになる計り、働いても働いても何かに追われて居ります。折角作物も上手になりましたが賣れないのと安いので、百姓生活がそろ〳〵厭に成かけてきました。然し手農から機農への私の夢の実現しない間は断じて止めない。身体が粉な〳〵になる迄働いて日本農業に適する機農の基本を作つて見たいと思つてます」とある。やり甲斐のある仕事だけに是非断行して欲しいと思う。▼柳友交歓の暑中御伺を多数申込んでいただいたことを感謝している。誌上からあつく御礼申上げる。今後とも一層の御支援をお願する。（路）

風趣豊かな
お好み食堂
御評判の名物食堂再開……七階
◇てんぷら　◇とんかつ
◇おでん　◇中華料理
◇お酒　◇ビール
◇フルーツジュース
甘棠茶屋『甘樂亭』
松坂屋
大阪日本橋

6月20日〜9月10日
夏の楽園
国立公園
友ヶ島へ
★電燈施設完備
★浴場、ポート、売店、食堂
ダンスホール等完備
★お楽に日帰りも出來ます
燈台見学、地下砲台跡見学、植物昆虫採集、海水浴、魚釣、貝拾ひ等々
★予約お申込みは売り切れない中に
南海交通社へ（なんば駅内／梅田新道／和歌山市）
★連絡割引乗車船券発売
なんばより　往復（大人 240円／小人 120円）
別に主要駅よりも発売
（団体割引あり）

使用料
★バンガロー（二人用 400円／四人用 600円）
★テント　五人用 200円
★なぎさの家（六畳 400円／八畳 500円／600円）
★サンマーハウス　一人 50円
★学校団体用宿泊所　一人 20円
（150名収容可能）
南海電車

Made in Occupied Japan


B列5号　毎月一回一日発行
川柳雜誌　第五卷　第八号
一冊　金三〇円（送料三円）
半ケ年概算　金一九八円
一ケ年概算　金三九六円
昭和廿五年七月廿五日印刷
昭和廿五年八月一日発行
（載轉禁）
大阪市住吉區苅代西五丁目二五番地
編輯兼発行人　麻生幸二郎
大阪市住吉區苅代西五丁目二五番地
発行所　川柳雜誌社
振替口座　大阪七五〇五〇

## 募集

### 課題吟募集

聖書（十句）高鷲亞鈍選（八月廿五日締切）

耳（十句）尾崎方正選（九月廿五日締切）

### 毎号募集

近作柳樽雜詠廿句）麻生路郎選

川柳塔（雜詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）（廿五日締切）

### 投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雜吟を募る。

▼『課題吟』は何人でも投句が出來る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。